

自己評価報告書

平成 23 年 4 月 28 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究 (A)

研究期間：2008～2011

課題番号：20242011

研究課題名 (和文) 小、中、高、大の一貫する英語コミュニケーション能力の到達基準の策定とその検証

研究課題名 (英文) Research into Development and Validation of English Language Proficiency Guidelines for Japanese Learners of English at Primary, Secondary, and Tertiary Education.

研究代表者

投野 由紀夫 (TONO YUKIO)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：10211393

研究分野：外国語教育

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：①英語教育政策 ②到達度指標 ③CEFR ④小学校英語活動 ⑤小中高大連携
⑥第2言語習得研究 ⑦シラバス開発 ⑧習熟度調査

1. 研究計画の概要

本研究は、日本における小学校～大学・一般を含む「英語教育到達指標の新基準」の提案とその内容の実証的調査・検証を行うものである。その具体化と内容の精査を行うため以下の研究計画を実施する。

- 本科研の前身である小池生夫氏を代表とした基盤研究 (A) で、小、中、高、大の各レベルでさまざまな資料を調査収集してきた。それらの資料の分析に基づいて CEFR-J (検証版) を提案する。
- CEFR-J の妥当性を多面的に検証する。またその検証方法自体を整理し提案する。
- CEFR-J を検証して改訂版を作成しつつ、具体的な実施のための方策と実施に必要な基礎資料を作成・公開する。
- CEFR-J を具体的に学校で運用してもらって実施上のさまざまな課題を浮き彫りにし、それらへの対処法を検討する。

2. 研究の進捗状況

日本の小学校～大学における学校英語教育の枠組みで共通に利用可能な英語能力到達指標の作成と実施に関する基礎研究およびそれに基づくプロトタイプの指標の提案とその検証ということが4年間の大きな目標である。到達指標の提案は世界的に影響力を強めている Common European Framework of Reference (CEFR) に基づき、1年目に本科研の前身となる小池生夫代表の基盤 (A) で作成した CEFRJapan のより詳細な検討を行っ

た。特にフィンランドの英語教育に範を取ったより詳細なレベル分けとデスクリプタの日本の現状分析に基づいた書き直しに注力した。同時に Nick Saville, Tony Green など CEFR 検証の中心人物に助言を得て、指標の検証方法に関する調査を広範囲に行った。

2年目には新たに「CEFR-J」と称するプロトタイプとなる指標のアルファ版を作成。これを検証するための方法論に関してヨーロッパ中心に海外調査を行い、特に English Profile などのコーパス基盤の言語特徴のレベル割り当てのプロジェクトや European Language Portfolio の分析などを行った。

3年目は「CEFR-J」のさらなる精査を行い、ベータ版を公開。検証の一環として教員によるデスクリプタ並び替え実験、ウェブによる学生の自己能力評価アンケートなどを作成・実施した。さらに最終年度に向けて、自己申告の能力と実際の能力とのずれをチェックするような実験計画などを各5技能別にワーキンググループを作成して検討中。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

理由:当初予定の検証版が最初の2年で完成、検証フェーズに入れている。

検証方法に若干修正があったが、より妥当な方向性を持っている。

Web アンケートの回収状況が心配だが、できるだけ努力したい。

4. 今後の研究の推進方策
最終年度にあたる今年度は以下のようなプロセスで研究成果を集約する。

1. CEFR-J ベータ版の検証作業

大別して3種類のデータを取る:

(A) 5技能別の自己申告と実際のスキルとの関係 および各グループで、学生の自己申告と実際のスキルの関係を調査

(B) 学生能力自己評価アンケート

CEFR-J 全体のデスクリプタに関して web アンケートなどを駆使して大量に自己申告データを採取する

(C) 教員による並べ替え実験

デスクリプタをレベル別に並べ替える実験を行い、順序の適正さを確認する

2. CEFR-J を利用した学校パイロット

具体的に学校に CEFR-J を利用してもらい、その現場での応用可能性を調査する

3. CEFR-J 活用資料集

CEFR-J を公開するに際して添付したい活用資料を構築する:

(A) T-series 構文・語彙抽出用検索式データベース

(B) ELP デスクリプタの日本語版データベース

(C) アジア英語教科書に基づく、CEFR-J 用レベル別語彙リスト

4. 国際シンポジウムの開催

CEFR-J を紹介するための国際シンポジウムを東京で開催する

5. まとめの報告書を作成する

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

① 投野由紀夫 「CEFR 準拠の日本版英語到達指標の策定へ」 英語教育 10 月増刊号、pp. 60-63. 2010 年、査読無

② Yukio Tono 「The role of corpus linguistics in redefining SLA」*Current Issues in Linguistic Interfaces* 2 vols.、Volume 2、pp. 499-513. 2009 年、査読有

③ Yasuo Nakatani 「Identifying Strategies that facilitate EFL learners' Oral Communication: A Classroom Study Using Multiple Data Collection Procedures」*The Modern language Journal* 94, i、pp. 116-136. 2010 年、査読有

④ 根岸雅史 「自然言語コーパスに基づく学習教材作成のための基礎的研究: 英語リスニング・テキストの CEFR レベルの決定要因とそれに基づくレベル推定の可能性」コーパスに基づく言語学教育研究報告 3 フィールド調査、言語コーパス、言語情報学 3

巻、pp. 195-210. 2009 年、査読無

⑤ 根岸雅史 「オーセンティック・リスニング・テキストの CEFR リスニングのレベル判断における諸問題」*ARCLE REVIEW* 3 巻、pp. 100-109. 2009 年、査読有

[学会発表] (計 60 件)

① Yukio Tono Corpus-based dynamic wordlists for English language learning and teaching: a critical appraisal of the English Profile Wordlists. TALC Organizing Committee - 9th Teaching and Language Corpora (TALC) Conference, 2010 年 7 月 1 日、Masaryk University, Brno, Czech Republic

② Yukio Tono Automatic extraction of L2 criterial lexico-grammatical features across pseudo-longitudinal learner, 2010 年 9 月 4 日、Reggio, Emilia, Italy

③ Masashi Negishi, Yukio Tono, & Yoshihito Fujita, A validation study of the CEFR levels of phrasal verbs in the English Profile Wordlists. British Association of Applied Linguistics - Annual BAAL Conference, 2010 年 9 月 11 日、King' College, London, UK

④ Yukio Tono Corpus-Based Research and its Implications for Second Language Acquisition and English language Teaching, LTTC Conference 2009, 2009 年 3 月 7 日、LTTC, Taipei, Taiwan.

[図書] (計 5 件)

① Yukio Tono, John Benjamins Pub. Co. Variability and invariability in learner language: A corpus-based approach. In Yuji Kawaguchi, Makoto Minegishi, and Jacques Durand (eds.). *Corpus Analysis and Variation in Linguistics*. (pp. 67-82.)、2009 年 398pp.

② 小池生夫・寺内一・高田智子・松井順子・財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会、朝日出版社、『企業が求める英語力』、2010 年、168pp.

③ 投野由紀夫(分担執筆)、松柏社 「教材とコーパス」『コーパスと英語教育の接点』(pp. 1-19) (中村純作・堀田秀吾編著)、2008 年、231pp.